



グレイザーに買収されてもチームは何も変わっていない。

事態になった。実力行使だけではない。たとえば買収が大詰めを迎えた時、グレイザーへの融資を検討している金融機関を突き止めると、ファンに呼びかけ、そこへ無用のフアックスを大量に送りつけたり、宅配ピザを依頼して、日常業務への妨害工作も行った。クラブのスポンサーになつてはいる会社の商品の不買運動も呼びかけ、ユニフォームのスポンサーを続けてきたボーダフォンは、昨季限りで契約を打ち切ったが、その理由として、この不買運動が

あるとも言われている。買収から1シーズンが経過したがクラブは変わりなく前進を続ける。彼らはなぜ買収に反対したのか。その理由は大きく分ければ、論理的な面と感傷的な面の両方にある。前者の一つは、グレイザーの買収によってマンUが多額の負債を背負うと同時に、ファンへ悪影響をもたらすことへの不安だ。グレイザー一家の買収総額7億9000万ポンド(約1600億円)の大半は借金でまかなわれている。借入金にはヘッジファンドからも含めて、約5億ポンド(約100億円)と推定されている。これが現在では、クラブの負債になつている。特にサポーターが問題視したのは、年間5000万ポンド(約100億円)に達すると試算されている金利の返済。大手会計会社は04-05シーズンのマンUの年間

総収入を1億6600万ポンド(約320億円)としているが、これはその3分の1に相当する金額だ。これで従来と同じようなクラブ経営ができるのか、という疑問が出るのは当然のことだ。すると必要なのは増収だが、真つ先にその標的になるのはサポーターだ。事実、ファンの財布を直撃する観戦チケットの値上げはすでに実行されている。来季のチケット料金は約12%上がることになったが、最終的には5年間で50%引き上げる書き真が描かれている。しかし、何よりもサポーターを怒らせているのは、昔から応援してきたクラブが、金銭目的で買収されていることだ。たとえば現在SUは存在しない。グレイザーの買収の過程で、強制買収されたからだ。彼らがクラブの株を保有するのは利益目的ではない。クラブの1オーナーになることで、応援するチームと自身を同化させたいからだ。だが、そん

な機会も奪われてしまった。しかし、サポーターの声がどうであらうとマンUは前進を続けていく。昨季の観客動員数も落ちることとはなかった。今季からは客席が増設されたために、収容能力も増える。それでも空席ができることはないはずだ。ユニフォームのスポンサーも、米国民保険会社のAIGが、ボーダフォンを上回る新契約を結んだ。少なくとも外見上のマンUは、これまでと変わりなく動いている。サポーターは本場のマンUのための新クラブ、FCユナイテッド・オブ・マンチェスターを創設し、グレイザーの経営が行き詰ったときに、株式を再購入するための基金も積み立てている。果たして、その活動が実を結ぶことがあるのか。解答はまだ出されそうにない。

## グレイザーの買収劇とその後

「買収から1シーズンが経過した現在の反応」

マンチェスター・Uは昨年の5月、米国人実業家グレイザーによって買収された。買収話が持ち上がるのとクラブの2つのサポーター組織は、これを阻止しようと実力行使も辞さない構えを見せ猛烈に抗議。だが、買収への流れは止めることができず、サポーターの願いは叶わなかった。買収から1年、クラブに何らかの影響は現れたのだろうか。

文●齊藤文隆  
Text by Fumitaka Saito

写真●原悦生  
Photo by Etsuo Hara

### 買収に反対するサポーター組織 猛烈な抗議活動が始まった

イングランド屈指の名門クラブにとって、それは一つの時代の終わりだった。2005年5月、米国人実業家のグレイザー一家がマンチェスター・ユナイテッドを7億9000万ポンド(約1600億円)で買収したのである。

1990年以来的の上場会社であるマンUは、以前にも買収の対象になったことがある。最も有名なのは1998年のマドック率いるBスカイBによるものだ。これは最終的に英国政府が許可を与えず実現しなかったが、グレイザー一家は見事に買収に成功したわけである。しかし、この買収に対するサポーターの抗議は猛烈であった。

マンUのサポーター組織として有名なのは、インディペンデント・マンチェスター・ユナイテッド・サポーターズ協会(IMUSA)とシエアホルダーズ・ユナイテッド(SU)であ

る。前者が発足したのは1995年。当初はスタジアム内で着席して観戦することに異議を唱えて始まった組織だが、その後は純粋なサポーターの利益を代表する活動を続けている。一方のSUはBスカイBによる買収が話題となった直後、マンU株を持つサポーターが集まって発足。目的は株式を持つことで発言権を得て、サポーターの意見を経営に反映させることだった。

しかし、そんな彼らにとって、金銭目当てとも思える、グレイザーの買収は受け入れられないものだった。かくして、普通のサポーター集団とは思えない組織力を持つ両団体を中心に、多岐にわたる抗議活動が始まった。

マンUの役員に決まったグレイザーの息子たちが初めてオール・ド・トラフォードを訪れた時には、ゲリラ的な抗議活動を展開。最終的にグレイザー・ジュニアたちは警察の車でスタジアムを立ち去る